

書 評

鳴海 風著，円周率を計算した男，
新人物往来者，平成10年刊，（1800円）

明治の昔はいざ知らず，私が学生であった頃 — 30数年の昔となってしまったが — 「日本人に数学が出来るだろうか」と進路決定に際して悩む者はいなかったと思う。高木，岡，吉田，小平，伊藤，加藤，岩沢，…と云った世界的指導者の名前を耳にしていたればこそである。それでも後年欧米（特に欧州）に長期滞在した時等「現代数学は一神教文化の産物ではなかろうか。日本の風土の中で数学をやる，と云うのはどう云うことなのか。」と云ったかすかな不安，迷いが頭の片隅を横切った記憶を持つ人も多少はあったのではあるまいか。

私自身もそんな思いがふと心に浮かんだ記憶がある。その時，しかし，同時に「完成した論文は確かに一神教的かも知れない。しかしそれを産み出した現場の営みは建部の仕事振りに近いのではないか。」との思いが私の気持ちの支えになったことを覚えている。

今や「建部賢弘賞」のお蔭で建部の名を知らない人は数学会会員諸氏の中にはいらっやらないだろうが，30年前その名前はそれ程ポピュラーなものではなかった。私がこの文脈で建部の事蹟をかなりの確かな形で思い起こせたのは，一にかかって教養課程の時の教科書が一松先生の名著「解析学序説；上，下」（裳華房，昭和37年（上），38年（下））であり，そこに（上巻 pp.233-235）建部の仕事の要を得た解説が一松先生の若者へのメッセージ「上記の建部の所論は，和算家のするどい直観力の典型であり，今日の学徒にも示唆する所が少なくないと思われるので，紹介した次第である。」と共に与えられていた，と云う幸運に拠る。このような個人的経験からも，又，もっと理念的に考えても，やはり日本の数学者が和算史に親しみを多少なりと持つことは有用でもあり，又必要なのではないか，と考える。

とは言い乍ら，お互い中々歴史書に手を伸ばす気にはなり難いものであろう。（何しろ高校時代歴史は苦手だった！）しかし，歴史に親しむ第一歩は人名になじむこと，とか，もしそうであるなら素人は正統的な歴史書から入るのではなく，まず歴史小説に親しめば良いのではあるまいか。

思えば現代の日本人の多くの日露戦争に関する知識は殆んど（教科書等ではなく）「坂の上の雲」と「海は甦える」の2作（いずれも文春文庫に収録）に由っているのではあるまいか。こう考えれば和算をテーマにした歴史小説集「円周率を計算した男」が「数学通信」の書評として取り上げられることは「文化としての数学」について語られることが多くなりつつある現在，真に時宜を得たことと言えよう。勿論，歴史「小

説」である以上、読者が作者の「思い込み」に影響され過ぎる危険はある。(もっともその種の危険は、「正統的歴史書」の場合にもあり得よう。)しかしながら、本書の場合、少くとも私はこの書の建部の数学に対する的確な評価に接して数学に関する部分については文句なしに作者の言うことに判断をゆだねようと云う気になってしまった。

この書は建部(及び関)を主人公とする第一話から始まって、久留島、中根元圭、有馬候、藤田貞資、会田安明、神谷定令、長谷川寛、山口和、日下誠、千葉胤秀、和田寧、内田五観、長谷川弘、…等々多くの和算家の織りなす人間ドラマを連作の形で時代順に描いて和算が幕末洋学に押され出す辺迄楽しく読ませてくれる。これ等の和算家の名前の内、中根以降は(有馬候、会田、和田を除いて)私には耳新しいものばかりであった(従って私にとっては和算家の名前に親しむと云う目的には極めて有用な書であった)が、作者は名のある和算家の配置については細心の注意を払った「歴史」小説を目指している様に思われる。(例えば和算に学問的にはさほど大きな寄与を為したとは言えないであろう神谷定令に関しても、彼が藤田貞資と会田安明との論争にどのような形で関わっていたか(第4話:算子塚)等と云う所は、史料をきっちり押えての叙述と思われる。[例えば三上義夫氏の「文化史上より見たる日本の数学(岩波文庫)」p.177等参照]但し、第3話「空出」の最後の所の有馬候は一寸水戸黄門的になっているように思えたが、まあここは数学には関係の無い部分と見做すべきなのだろう。)

この連作の内第5話(風狂算法)は私の好みではないが(何しろハッピーエンドでない小説は読む気がしない、と云う安手の読者なのです)読後山口和(第6話にも登場する)と云う人は何か心にひっかかる、と云うようなこともある(これがやはり日本人の血なのかな、とも思った)けれど、何と言っても最も心ひかれるのは本全体の表題ともなっている第1話「円周率を計算した男」である。隴外の「安井夫人」をふと連想させるこの作品は多くの数学者の心の琴線に触れ、また、さらなる前進の為の力を与えてくれるものであろう。(尚以下に述べるのと類似の理由で第2話「初夢」も読者を暖く元気付けてくれる佳品と思う。)

この作品で私は「解析学序説」には触れられていなかった重大な事実を学んだ—「帰納的な数学者」は学問的に長命なのであろう、建部がその生涯最高の仕事を成し遂げた時彼は還暦に近かったと云うことを。まだまだ私も成長できるかも知れない、と云うのは何と云う素晴らしい励ましであろうか。

このような見事な「和算史」を私共に示して下さった作者は次はどの方向に向われるのであろうか。あるいは御専門と関係して「からくり儀右衛門」に話は続いて行くのもあろうか。しかし、もし数学屋の勝手なお願いが許されるなら是非数式をもう少し増して(数式を少し入れるだけでどれ程説明が分り易くなるかの好例は第1話の

書 評

一つの backdrop として用いられている「さっさ立て」の説明（二元一次連立方程式を書き加えてある）であろう。又、会田の"論争"の内容を想像するのに p.184 の式等極めて有益であろう。）「教養課程の副読本」としても使える和算に関する御本をお書き願えないだろうか。丁度 Gårding の *Mathematics in Sweden before 1950* (AMS, 1998) が偏微分方程式論の講義のテキストとして見えそうな内容であるのと軌を一にして、そんな本があれば日本の文化に益する所大なのではなかろうか、と思うのだが。

何はともあれ、このような良い数学を良い数学と判断できて、しかも数学屋の心情をも酌み取って下さる和算の語り部を得たことは真に喜ばしく、鳴海氏の一層の御健筆をお祈りしてこの小文を終わりたい。

(河合 隆裕：京都大学数理解析研究所)

追記：(9月10日)

著者の御好意により「アゴラ」本年5月号（プレジデント社）(pp.36--39) に鳴海氏御自身がお書きになられた建部賢弘の略伝が掲載されていることを知った。歴史「小説」と歴史の違いに興味のおありの方は参照されたい。